公益財団法人 日本フィランソロピック財団
第1回「社会的養護下の子ども応援基金」助成 記録冊子

社会的養護下の子どもたちとのアーティスト・ワークショップ

～児童自立支援施設での実践から～

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

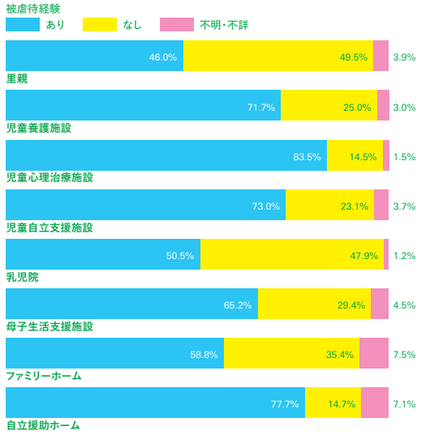
はじめに

「芸術家と子どもたち」では、2010年度より児童養護施設を対象としたワークショップに取り組んできました。その経験から、社会的養護下にある子どもたちを対象とした活動を拡充し、2020年度には養育家庭の子どもたち、2022年度には児童自立支援施設で暮らす子どもたちとのワークショップを開始しました。

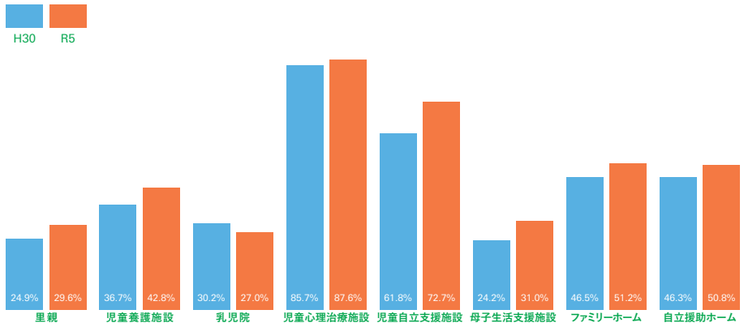
子どもたちの現状

社会的養護下にある子どもたちは約42,000人います。子どもたちの現状としては、被虐待経験のある子どもや、障害等のある子どもが全体的に増加しています。また、彼らの自立後の現状として、制度的に早期の自立が求められるものの、被虐待経験等による心の傷や、心理的な弱さをかかえながら、自立後の毎日をギリギリの状況で暮らしている若者も少なくありません。こうした経済的、心理的支えが期待できない若者は、反社会的組織等に取り込まれるリスクや、ふとしたきっかけで仕事を辞めてしまう等、貧困に陥るリスクが高いと言えます。彼らが施設等を退所した後の厳しい現実を乗り越えていくためには、精神的な強さや、支えてくれる人たちと関係性を築いていく力が必要であり、心理的ケアや心理的成長を促す体験の機会の充実がより一層求められています。

児童養護施設入所児童等調査結果
（令和５年２月１日）



社会的養護を必要とするこどものうち、障害等のあるこどもの割合



※P2–3データ出典・参照元：こども家庭庁「社会的養育の推進に向けて」令和７年９月

芸術家と子どもたちのワークショップ

子どもたちが「アーティストによるワークショップ＝自分たちだけのために用意された特別な出会いの場」で、新しい価値や表現を生み出すプロフェッショナルであるアーティストと共に表現活動に取り組む体験を通して、彼らの好奇心や感動する心、自他の表現を認める心を豊かに育む機会をつくりたいと考えています。また、一人ではなく、誰かと一緒に集団での表現活動を体験することで、自分自身を見つめ、前向きに自己をとらえる経験を重ね、自立や社会参加に向けた主体的な姿勢を育むことにつながると考えています。

2025年は、公益財団法人 日本フィランソロピック財団 第１回「社会的養護下の子ども応援基金」助成を受けて、さまざまな社会的養護の場でワークショップを実施しました。この冊子では、児童自立支援施設での取り組みを中心に、ワークショップの様子や、参加した子どもたち、職員の方々の声をご紹介します。

2025年実施データ

	時期	実施日数	学年・年齢	参加人数	アーティスト（ジャンル）
国立武蔵野学院（児童自立支援施設）	8－9月	2日	小学６－高校２年生	18人（延べ33人）	ピスタチオ（美術）
埼玉県埼玉学園（児童自立支援施設）	7－10月	3日	小学５－中学３年生	38人（延べ104人）	アオキ裕キ（ダンス）
クリスマス・ヴィレッジ（児童養護施設）	7－12月	7日	小学1－高校２年生	5人（延べ25人）	康本雅子（ダンス）
養育家庭※	3月	1日	6－18歳くらい	11人	関根真理（音楽）
	10月	1日	0－18歳	26人	ピスタチオ（美術）
合計		実施日数 14日		参加人数 98人（延べ199人）	

※養育家庭は、東京都小平児童相談所フォスタリング機関であるNPO法人キーアセットと連携して実施。

施設等について

児童自立支援施設
（全国58か所　入所児童数1,130名）
児童自立支援施設は、不良行為をしたり、家庭環境上の理由があるなど、生活支援を必要とする子どもが入所する児童福祉法上の施設ですが、近年は、発達課題や被虐待経験のある子の入所が増え、コミュニケーションや愛着形成の問題等、心理的な支援の充実が求められている状況です。

児童養護施設
（全国607か所　入所児童数22,162人）
児童養護施設においても、心理的なケアが必要な子どもが増加していますが、施設の多機能化による職務の増加および施設職員の人員不足により、対応がおいついていない現状があり、心理的ケアや心の成長につながる体験活動の外部からの支援が求められています。

養育家庭（里親）
（登録里親数17,381世帯
委託児童数6,406人）
養育家庭（里親）とは、さまざまな事情で家庭で暮らすことができない子どもを、養子縁組を目的とせずに、一定期間養育する家庭のことです。養育家庭の孤立を防ぎ、支援体制を強化するために、里親と子どもたちにさまざまな支援を行うフォスタリング機関の設置が全国的に拡大しており、地域の養育家庭同士の交流の機会づくりなども行われています。

児童自立支援施設①
国立武蔵野学院 ×ピスタチオ 小村歩

2日間のワークショップを通して、普段なかなかできないダイナミックな美術の体験ができるように内容を検討しました。

紙を自由に折り、好きな色で染める

大きな布は絞って染める

染め物の説明をするアーティスト

職員の方と談笑しながらつくる

作品を乾かすと風景が変わって見える

染めたものにさらに絵を描き加える

1日目｜いつもの食堂の景色を変えよう!

大きい布や障子紙を折ったり畳んだり縛ったりして染めて、偶然生まれてくる模様を楽しみました。そこから想像して、さらに絵を描き足して作品が完成。出来上がった作品を屋外に干して乾かすと、いつもの風景が少し違って見えました。

2日目｜もののけ妖怪? 妖精? ファッションショー

10月には中秋の名月があり、満月に変身するというストーリーは映画やゲームでもたくさん出てきます。ワークショップでいろいろな材料を使って変身というテーマでコスチュームづくりを行いました。

布や毛糸など たくさん用意された材料

スケッチしながら何をつくるか考える

一人でできないことは職員の方と一緒に

アーティストと相談しながらつくる

それぞれの色や形ができてくる

コスチュームを着てお披露目

児童自立支援施設②
埼玉県埼玉学園 ×アオキ裕キ

子どもたちが生活している寮をもとにグループを分け、1日3グループ×3日間のワークショップを実施しました。子どもたちは、学園の中にある学校で体育や部活の時間も過ごしますが、運動や競技とは違ったアプローチで、身体をほぐすことで心もほぐしていきました。ゆっくり身体をリラックスさせた後は、言葉のイメージを身体で表現すること、絵を描いてそれを動きにしてみることなどに挑戦しました。振付を覚えることとは違う抽象的な表現もありましたが、一人ひとりの動きや想い、発想が認められるという体験を少しずつ積み重ねてダンスが生まれていきました。

1日目

寝転がり、目を閉じてリラックス

ペアで相手が描いた絵から動きを考える

身体に丁寧にふれながらマッサージ

音楽の生演奏で踊る

お互いの踊りを見合う

好きな絵を選んで踊る

3日目

真似をしながらいろいろな動きに挑戦

絵からイメージした一人ずつのダンス

絵から動きのイメージを広げていく

みんなでお互いの動きを真似る

ねじる・のばす等キーワードからの動き

一人ひとりにオリジナルの
ダンスが生まれていく

ワークショップの実施後には、子どもたちと職員の方にアンケートを実施しました。
その中から抜粋して、子どもたちや職員の方の声を紹介します。 回答者数(2施設)：職員 2名、子ども 56名

子どもたちの声

Q1.
今回のワークショップに参加した感想を教えてください。

●いろいろな作品があって、個性豊かで面白かったです。
●自分の好きなものを使った表現ができ、とても楽しい時間でした。また、布一枚でもここまで個性が出るのか、と衝撃も受けました。
●ありのままの自分に近づけた気がしました。「恥ずかしい→笑い→楽しい」となった気がして、こうなるならなんでも楽しくできると思いました。
●これと決まった形のないものだったから自由にできて、楽しかった。
●リラックスをした後に、伸びをしたり、好きな道を歩いたりして、自分の知っているみんなとは違うところも発見できました。
●自分も知らなかった一面を自分だけじゃなく、みんなに知ってもらえて嬉しかったし、みんなを驚かせられて、より一層仲が深まったと思います。

Q2.
ワークショップの中で面白かったこと、楽しかったこと、印象に残っていることは何ですか。

●最初は上手くいかずに大変でしたが、やっていくうちにだんだん楽しくなっていき、最後は笑顔で終われて良かったです。
●布を折って切ったり、布に自分の個性があふれるようなデコレーションをして、最後には完成した自分の作品をみんなに見せて共有して面白かったです。
●もっと何かをつくってみたいです。
●最初のリラックスタイムは、いつものことを忘れて夢中になっていました。周りの人たちの表現を見るのがとても面白かったです。最後の一人で表現するのが、とても恥ずかしかったけど、一番印象に残りました。
●自分で自由な表現ができてスッキリしたような気がします。自分がこんな表現ができるんだとびっくりしました。
●一枚の絵で複数人が一斉に踊り出すのは、いろいろな価値観を知れて面白かったです。動きのキャッチボールでは相手と同じ瞬間を共有できて楽しかったです。
●自分の心を身体で表現したりするのがすごい楽しかったです。それと、自分以外の方たちの表現とかも、みんな個性的で面白かったです。

Q3.
アーティストに伝えたいことがあれば、自由に書いてください。

●私は身体を動かすの、あんまり得意じゃないんですけど、毎回ワークショップが楽しみでした。おもしろ～い動きから、カチコチな動き、や～わ～ら～か～な動きなど、いろいろなのをやっていて超楽しかったです。自分の個性が最大限出せたと思います。アオキさん（アーティスト）のウォーミングアップの内容から惹き込まれていきました。
●私が表現した時に、必ず「ナイス」って言ってくれたり、うなずいて話を聞いてくれたり、嬉しかったです。私の中で、少しK-popとかのダンスとは違う、自分の気持ちを伝えたり、他の人を真似するのが、最初はちょっと恥ずかしかったけど、その日のうちに、恥ずかしさが無くなり、何かモヤモヤすることがあっても、この時間で忘れるくらいあっという間に感じました。それから、ソワソワしている日の夜は、呼吸とかやって落ち着けました。正直、普通に生活していると、なかなかゆっくり自分と向き合う時間は今までできていませんでした。でも、今回、みなさんと一緒にやって良かったなって、心から思います。夏の暑い時から、今までの３回、本当にありがとうございました。

職員の声

Q1.
ワークショップへの参加は、子どもたちにとって、どんな成果・効果があったと思われますか。

●普段できない体験（布を自由に絞って染める、自分だけの衣装を自由につくる）ができたと思います。自由に選ぶ体験がなかなか無いため、喜び、達成感を体感できたのではないかと思います。
●アオキ裕キさんの「ナイス」「いいね」など子どもの動きを誉めてくださる声かけで、子どもたちは自由な発想で、言葉を用いず全身を使って心の内側を表現することに、楽しさや喜びを感じている様子が見受けられました。学園生活は「決まった日課」「ルール」等を守らせる生活指導がメインのため、「自由」ということに戸惑いもあったようだが、自分も知らなかった新たな一面に気づくきっかけにはなっていたと思います。

Q2.
印象に残った子どもの様子やワークショップで現れた意外な一面などあれば、自由にご記入ください。

●正直、２回目のワークショップは、子どもたちは意欲的にいきいきと取り組めるのか、半信半疑な思いでした。しかし、予想以上に衣装づくりをどの子どもも意欲的に取り組んでいました。特に、普段こういった活動に前向きでない子も、いきいきと取り組んでいたことが驚きです。
●普段は目立たない子や、入園間もない子が、予想以上に積極的、意欲的に参加してくれて、自由な発想で全身を使って何かを表現してくれていた。

Q3.
ワークショップに対する、ご意見、ご感想などがありましたら、お書きください。

●回数、活動内容共に子どもたちに合っていました。ただ、１回目の布を染めるワークショップは、今年度初回だったことと、活動内容に少し物足りなさもあったため、打合せの段階で工夫が必要だったように感じました。
●たくさん誉めてくださる声かけをしていただき、「誉める」ことの大事さを改めて実感しました。施設では、注意、指導することの方が多く、北風と太陽でいう「北風」役ばかりしている気がしますが、アーティストの方々は、太陽であり、子どもたちは誉められることで自分の殻を脱ぎ捨てて、活動に参加していたと思います。

埼玉県埼玉学園でのワークショップ最終回後に、
事業の振り返りを兼ねて職員とアーティストへのインタビューを行いました。
児童自立支援施設でのアーティスト・ワークショップについて、
それぞれの立場からの想いをご紹介します。

埼玉県埼玉学園：今井 剛（調査担当課長）
アーティスト：アオキ裕キ（ダンサー・振付家）
進行：中西麻友（NPO法人芸術家と子どもたち）

全文は WEB コラムで公開
※URL https://www.children-art.net/post_column/post_column-13543/

子どもたちの表情に見えた変化

中西：これまでを振り返ると、最終回に女の子たちが名残惜しそうにしてくれたのが、とても嬉しかったです。男の子たちのグループは恥ずかしさも感じられましたが、3日間のワークショップを振り返っての感想などをお聞かせください。

今井：グループの実施順（※注）は、たまたま私の担当が女子だったということもあって、最後を女子にしたらハマった感じがありました。恥ずかしさを隠し切れない男子の後、最後に女子が出てきて、本当にアイドルが来たかのような流れになったのが、すごく良かったです。こちらが期待することや伝えたいと思っていることが120%伝わっている気がしました。男子は少し殻を破り切れなかった印象もありますが、勉強や運動は学園でも取り組む機会があるものの、今回のように「正解のないもの」にはなかなかふれる機会が無かったので、総合的にはすごくいい機会だったのではないかと感じます。

中西：男の子たちも、一人で踊るワークではじめは誰かを誘う子もいましたが、そのうちみんな一人で踊っていて、感心しました。また、自分が踊ることは恥ずかしそうにする子でも、誰かが踊っているのを見るときはニコニコしながら見守っている感じがありました。

今井：表情が柔らかかったですね。

アオキ：受け入れている。だから、こういう表現もあって、こういう人もいてということが寛容できる機会になったのではないかなと思います。動くのが苦手な子も、人がいろんなことをするのは、見て楽しめる。それはすごく大きなことだと思うし、これを何回か繰り返すと、男子全員が動けるようになるかもしれない。3回（ワークショップを）繰り返した中でも、進化はずっとしてきた。（アシスタントの）丈くんの歌も若者の動きに合っていて、揺さぶられたのを感じたかな。本当に良い空気を感じました。

中西：最後の感想タイムで、ある子が「自分の心に優しく受け取りたい」と言ってくれたことが印象的でした。子どもたち同士が受け入れ合っていると感じられる雰囲気や、「先生もやっていい?」と大人も自然に入っていける空気がありました。

アオキ：職員の方が一緒に参加してくれるのは、やはり大きい。（これまで経験した他のワークショップで）女の子同士でも恥ずかしがってやらない場面はよく見るけど、あれほど開けた関係性がつくれるというのはなかなかないと思います。

※注：埼玉学園では、男子2グループ、女子1グループの3グループに分けてワークショップを実施。

埼玉県埼玉学園：
今井 剛（調査担当課長）

アーティスト：
アオキ裕キ（ダンサー・振付家）

進行：
中西麻友（NPO法人 芸術家と子どもたち）

児童自立支援施設での アーティスト・ワークショップ

中西：児童自立支援施設では、勉強や運動など「決まったこと」に取り組む時間が多いと思います。アーティスト・ワークショップには、どんな違いや意味があると思われますか。

今井：普段は規則正しい生活を重視しています。ここに来る子の中には、昼夜逆転の生活や非行文化の中にいた子もいますから、一般に比べたら刺激を遮断された安心できる環境の中で、勉強・運動・食事・睡眠のリズムを整えていきます。そんな日常の中に「正解のない時間」が入ってくることによって、子どもたちの中にどんな変化が起きるのかは、正直、未知の世界でした。けれど、今のところマイナスな影響はありませんし、ビデオで他の職員にも見てもらいたいくらいです。子どもたちがこれだけ自由な発想で職員の想定している以上の動きをしていることを、良しとしてくれる職員がいっぱいいてくれたらいいなと期待していますが、いろんな職員がいるので、いろいろな捉え方もあると思います。

中西：（アオキさんにとっては）初めての児童自立支援施設でのワークショップということでしたが、子どもたちと出会ってみてどんなことを思われましたか。

アオキ：自分はつっぱりの時代に生きてきたから、何かしらそういう要素がある子がいるんじゃないかというイメージがありましたが、全然違っていました。どこにいてもおかしくないような子たちで、生きてきた、育ってきた環境で、変わってしまうのかなと。そして、子どもたちの可能性もすごく感じたし、ここが安心して改善できる環境だなっていうことをすごく感じて、もっといろんな人が、こうした施設のことを知ることが大事なんじゃないかなと思います。

継続することで広がる子どもたちの世界

中西：ワークショップを続けるとしたら、やってみたいことや要望などはありますか。

今井：こちらからオーダーするよりも「こんなのもあるんですけど、どうですか?」と提案していただき、それで子どもたちがどんな反応をするのかを見ているのが、正直すごく楽しいです。分かっていることじゃないところがあるから、広がりがあって楽しかったです。今回も、最後にこんなふうになるとは、最初は想像できなかったものが見られました。

アオキ：どんどん継続できるといいですね。アーティストの数だけ表現があって、その人たちの見ている景色はみんな違うので、それを体験してもらうことは子どもたちの視野の広がりにつながると思います。こういう生き方があるんだっていうことも感じただろうし、変な大人に会う貴重な機会だと思います。

中西：見ている私たちもみんなの踊りに勇気づけられました。彼らに、退所後も安心できる場所や活躍できる場所が見つかることを願いつつ、もしまた機会があるなら、別の新しいことを「こんなこともあるんだ、あんなこともあるんだ」って一緒に続けていきたいと思える出会いに感謝しています。

私たちの活動に賛同し、協賛・助成・寄付といった形で
支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。
ご関心をお持ちの方は、ぜひ事務局までお問合せください。

NPO法人芸術家と子どもたち

〒170-0011
東京都豊島区池袋本町4丁目36-1
旧文成小学校2階
TEL: 03-5906-5705
FAX: 03-5906-5706
MAIL: mail@children-art.net
HP https://www.children-art.net/

公益財団法人 日本フィランソロピック財団
第1回「社会的養護下の子ども応援基金」助成 記録冊子

発行日：2026年1月26日
発行者：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち
編集・デザイン：浅野 豪
写真：金子愛帆

※無断転載・複製を禁ず